
聖雪夜の殺人

ナイトバロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖雪夜の殺人

【Nコード】

N6597F

【作者名】

ナイトバロン

【あらすじ】

小五郎、新一、平次の三人は、ある推理作家のデビュー二十周年記念パーティー出席することに。不可解な連続殺人に、三人の名探偵が挑む。

プロローグ（前書き）

完全に見切り発車なので、今回は犯人当てクイズ形式にはしませんでした。

プロローグ

「へくしゅん！」

十二月二十四日、午後六時二十五分。今日はクリスマス・イブ。身の凍るような寒さの中、毛利蘭は工藤邸へと歩みを進めていた。片耳に携帯電話を押し当て、空いている手は、コートのポケットへと突っ込まれている。

『おいおい風邪か？』

心配そうな新一の声が、スピーカーから漏れる。少し電波が悪いようで、こちらの声が聞きにくいのか、さっきから何度も前の言葉を聞き返してくる。こちらは問題なく聞こえているのに。

蘭は、鼻をすすりながら、

「ううん、大丈夫。少し寒かっただけ。それより、新一こそ風邪なんてひいてないでしょうね？ 明日の約束、キャンセルなんて嫌だからね？」

『わーってるよ。こっちは、事件、事件で風邪をひいてる暇もないっつーの』

「大馬鹿推理之介」

『え？ なんだって？』

「なんでもないっ」

新一のやつ、自分の都合の悪いことを電波のせいにして誤魔化してんじゃないでしょうね。それならば……。

「私ね……、ずっと前から新一のことが好きだったの」

『な……！が……くて……えな……ぞ。……もう……てくれ』

どうやら、蘭の方も電波状況が悪くなってきたらしい。蘭は、ころうじて聞こえる新一の声の断片をなんとかして聞き取ろうとする。しかし、その作業は形だけのものだった。蘭の頭は、あることでいっぱいだったからだ。

（さっきのセリフ、新一に聞こえてないわよね……）

顔が熱くなり、赤面しているのが自分でもわかる。胸の鼓動は早鐘のように高鳴り、そのリズムに合わせて、歩調が自然と速くなっていく。クリスマスという年に一度のイベントが、蘭の心を開放的にしているのかもしれない。

『おい、蘭。聞こえてるかー？　　なんだか電波状況が悪くて……』

新一の声に、はっと我に帰ると、工藤邸を遥か後方に置き去りにしていたことに気づく。頭をぽかぽかと叩き、回れ右をして元来た道に戻る。

蘭は平静を装いつつ、

「う、うん！　聞こえてるよ」

改めて、工藤邸の前へと立つ。いつ見ても立派な建物だ。うちの毛利探偵事務所とは規模がまるで違う。そんなことを考えながら、

蘭は携帯を反対の手に持ち替え、

「ねえ新一、外を見てみてよ」と切り出した。

蘭の意図にすぐ気付いたらしい新一は、間髪入れずに答える。

『ああ、初雪だろう？』

今年の初雪は、クリスマス・イブの夜に降り出した。街灯りに照らされて、今にもキラキラと輝きだしそうな粉雪たち。蘭は居てもたってもいられなくなり、コートに袖を通して、工藤邸へと急いだ。約束は明日のクリスマスだが、この深々と降りしきる雪を、新一と一緒に見ていたかったからだ。

携帯電話のスピーカーから、弾むような声で新一が言う。

『きれいだよなあ。もう薄らと積もってるぜ。明日まで降り続けば、東京では珍しいホワイト・クリスマスだ』

「本当、ロマンチックだね。ところで新一」

『ん？　なんだよ』

「今、どこにいるの？」

『……へ？』

「だって新一の家、明かりがついてないから」

工藤邸は暗く静まり返っており、街灯の明りが、家の一部を弱々しく照らしていた。

『……俺の家の前にいるの？ 雪が降ったからって？ ……ぷっ』

そういうや否や、新一はいきなり笑いだした。その大きな笑い声に驚いた蘭は、反射的に電話を耳から離れた。

笑い声がある程度おさまったことを確認し、改めて電話を耳に近づけ、ふてくされ気味に言った。

「なによ、悪かったわね、雪くらいではしゃいじゃって。どうせ私はお子様ですよ！」

『あはは、悪い悪い。……あ、やべ。携帯のバッテリー切れそうだな。実は今、お——』

最後の言葉を言い切る前に、電話は向こうから切れてしまった。蘭は迷っていた。このまま家に帰ろうか、それとも、彼の用事が簡単なものであると仮定して、帰ってくるのここで待とうか。

空を見上げる。小さな溜め息が、白い息と共に寒空へと消えていった。

プロローグ 2

吸いかけの煙草を車の灰皿で揉み消す。灰皿は吸殻で一杯になっており、何本かは床にこぼれ落ちていた。

「おい探偵ボウズ、今の電話、相手は蘭じゃねえだろうな」

小五郎は、後部座席に座る工藤新一を、バックミラー越しに睨みつけた。小五郎は新一を、一人娘の毛利蘭をたぶらかそうとしている要注意人物として認識している。

「あ、あはは」

笑って誤魔化す新一。そんな彼に、隣に座っていた服部平次が助け船を出す。

「ええやないか、おっちゃん。今日はクリスマス・イブなんやし、彼女にラブコールくらい。なあ、工藤」

にんまり笑う平次。

ひきつり笑いの新一。

「ったく、色惚けしやがって……」

小五郎は小さく舌打ちをすると、攻撃の矛先を、大阪の高校生探偵に向けた。

「だいたい、お前の連れは放っておいていいのかよ。彼女、蘭との買い物後は、ずっとビジネスホテルで一人なんじゃないのか」

「ええんや。今日はあのねーちゃんと久々に会えて満足しとるやろ。俺との約束はどうせ明日やし。それに、こっちの方が面白そうや」

なあ、と平次が新一に同意を求めると、新一はそれに満面の笑みで答えた。

先週、小五郎は一通の手紙を受け取った。推理小説界の大御所、島野莊三のデビュー二十周年記念パーティーへの招待状だった。小説に出てくる名探偵のように次々と事件を解決する小五郎に、ぜひ出席してほしいとのことだった。予定は特になし、美味しい料理と酒が飲めるなら、喜んで出席しようと、すぐに記載された電話番号をプッシュした。

そして出発当日。探偵事務所を訪れていた新一と平次に、あの招待状を見られてしまった。すでに和葉と蘭が出払っていて、探偵事務所は三人きり。新一と平次は、否応なしに小五郎の脇へピタリとくっつき、小五郎を連行する形でレンタカーを借り、彼の屋敷へと向かって車を発進させたのだった。運転じゃ酒が飲めないという小五郎の訴えは、虚しくも却下された。

ついてない。なんで俺がこいつらの運転手をしなきゃならないんだ。さっきから見えるのは木ばかりだし、本当にこの森の中に屋敷なんかあるんだろうな。……おまけに雪まで……、最悪だ。小五郎は自分の不運ぶりを恨んだ。

「おっちゃん、やっと見えてきたで」

平次が窓の外を指さしている。進行方向から見て右斜めほどの木

々の間に、ぽつりぽつりと明かりが見えだした。目的の屋敷まで、もう一息というところまできたようだ。

ようやく運転から解放される。安堵の色を浮かべ、小五郎は新しい煙草に火を点け、美味そうに煙を吸い込んだ。

第一話：島野の過去

砂利敷きの小さな駐車場に車を止め、小五郎達は屋敷の正面玄関へと向かった。

「毛利小五郎様と、お連れ様の工藤新一様に、服部平次様ですな。どうぞこちらへ」

老人が、小五郎達を建物内へと招き入れた。頭は禿げ上がっており、残った側頭部の毛はきれいに白く染まっている。深く曲がった腰が、老人を見た目以上に小さく感じさせる。ちゃんと背筋を伸ばせたなら、小五郎より頭一つ小さいくらいだ。

「私は、執事の高野重蔵と申します。なにかあれば、なんなりとお申し付けください」

そう言うのと鷹野は、さらに深々と頭を下げた。しゃがれ声がホールに反響する。

「申し訳ありませんな。急遽、連れが二人も増えてしまっ」

そう言っって小五郎は、後ろで突っ立っている二人を睨んだ。新一と平次は、小さく頭を下げた。

高野は、ゆっくりと首を振り、

「いえ、こちらは構いませんよ。ご主人様は、人が多く集まるところはあまり好みませんが、お連れ様があの東西の高校生探偵だと聞くと、くや否や、子供のように喜んでおりましたから。広間へご案内いたします」

高野は小さく微笑むと、踵を返して歩き出した。小五郎たちもそのあとに続いた。その背中に、小五郎が問いかける。

「我々の他に、客はどれくらい来ているんですか？」

「三名でございます」

「たった三人ですか。あの島野先生のデビュー二十周年のお祝いに」

新一が言った。

「さきほども申し上げたとおり、ご主人様は人の多い場所は好みません。顔見知りの作家先生の記念パーティーなどには、まあ付き合いなどもありますからな、参加しますが。帰ってくると、いつも疲れきっていますよ」

「そんな繊細さが、あの大胆で、それでいて緻密な作品を生み出すんでしょなあ。なーっはっは！」

「工藤、このおっちゃん、島野荘三の作品を読んだことあると思うか？」

「いや、まったく」

二人からため息が漏れた。

「他のお客様はすぐにご紹介いたします。そして、もう一人」

高野が振り向かずに行った。

「赤井茜様という方が御見えになっております」

声のトーンが、さきほどより若干落ちたように小五郎は感じた。

「ご主人様には、茜様がお見えになっていることは、まだお話ししておりません。広間とは別の部屋で待機していただいています」

「どういうことや？」

平次が小さく首を傾げた。

高野は廊下で立ち止まると、半身をこちらに向けた。

「茜様は、ご主人様のご息女なのです」

「あれ、島野荘三って、たしかまだ独身ですよね？」

新一の問いに、高野は大きく頷いた。

「実は、ご主人様は一度ご結婚なされていた時期がございました。これは作家デビューなさる前の話でございます。……まあ色々ありましてな、離婚という形になったのだそうで。その時、ご主人様には三歳になるお子様が。元の奥さまがお引き取りになられたそうで」

小五郎が口を挟む。

「それが茜さんということですか」

高野は頷いた。

「そうなる、二十何年かぶりの再開になるわけですか。しかし、何故島野さんには知らせていないのですか？　なにかまずいことでも？」

慌てて首を振る高野。

「ご主人様は、前々からご息女の居場所を探しておいででした。それにはまあ……、深い事情がありまして。どうかして、茜様を見つけて成功した我々は、ご主人様の二十周年パーティーにこっそりとお呼びし、ご主人様を驚かせようと計画したのです」

高野は、玄関で見せた笑みを見せた。

そんなことしたら腰抜かして、さらに寿命まで縮まっちゃうんじゃないか。平次や新一の顔を盗み見たが、その表情から、考えていることはあまり変わらないだろうなと小五郎は思った。

「茜さんは、どんな人なんですか？」

新一が言った。茜という人物に興味をもったようだ。高野は歩みを再開しながら、

「少し前まで、映画などで使う特殊メイクの仕事をしていたそうです。彼女は大学には進まず、特殊メイクの専門学校に通っていたそうです。そこでの成績はトップクラスだったとか」

「へえ、そらすごいな」

「ええ。しかし、昔は荒れていた時期などもあったそう。まだその頃の悪友と手を切っていないようでした。それと、どうも変わった方です。今日など、私の顔を見るなりクスクスと笑いだして」

その時のことを思い出しているのか、目は空中をさまよい、ぽかんと口を開けている。

「島野さんの元奥様は、娘さんの屋敷訪問にどのような反応を？」

小五郎の問いに、高野は淡々と答える。

「自殺されたと聞いております」

「え……」

「茜様が小学校二年生の時だとか」

三人の間に沈黙が訪れた。ちょうど、広間の扉を前にして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6597f/>

聖雪夜の殺人

2010年10月11日08時20分発行